
おつまみの短編集

つんどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おつまみの短編集

【Nコード】

N3501Y

【作者名】

つんどら

【あらすじ】

拍手に置いていた小話とか短編作品の番外編置き場。不定期更新、長さはピンキリ。妖怪ものとか、神話系とかその他。基本的に既出作のみです。

異類婚姻譚 「記憶喪失」

我輩は女子高生である。名前はまだ無い。

「で、記憶喪失という訳か」
「でしようね」

向かい合わせに、大きめの岩に腰掛けて首を傾げ合う。

「どうしてそんな事に。というか、いつからだ……」
「気づいたらこの岩の上でしたね」
「さっきか」

はあ、と溜息を吐くその 人外。

「とりあえず自己紹介しましょうか」

頷くその人。何か羽生えてるけど、えーと、イケメンだ。

「女子高生だと思います。名前は忘れました」
「楓。鴉天狗だ」

黒い髪に、赤味がかった茶色の目。服装は普通なのに、背中の黒い翼が目立つ。

鴉天狗、って何だっけ。

「それはまた。初めて見ましたね」

「それはそうだろうな」

「人前には出ないんですか、やはり」

「ここ百年はそういう決まりだ」

決まりとかあるのか。

「……それで、私はどうしてここに？」

「攫ってきた」

「それはまた妖怪らしいことを……念のため聞きますが、生贄とかではないですね」

「まさか」

記憶が無い上に荷物も持たない私は、今は楓さんに任せるしかない。

生贄は流石に御免だと思ったけど、そうではないらしい。

「惚れた」

「……はい？」

「歩いていて、惚れたから思わず攫ったんだが」

思い切りが良すぎる。

「記憶が無いので、怒るにも怒れないと言いますか」

「結婚してくれ」

「はい。……あっ」

条件反射で返事をしてしまった。

みるみるうちに喜色に染まるイケメン顔。おお、何か間違った。

「末永くよろしく頼む。……これを飲め」

「え、あー。何ですかそれは」

「寿命が1000年延びる薬だ」

なんてこった。

口に押し込まれたものを飲み込んでから、猛烈に後悔した。

「ええとですね、先程のは条件反射と言いますか」

「いいだろう。別に」

「種族が違いますし」

「異類婚姻譚。良くあることだ」

「そう、でしたっけ」

「年間100組は軽いな」

「……は、はあ」

「テレビにもよく出る」

と。

なんだかんだで丸め込まれた私は、完璧に忘れていた。

“ここ百年はそういう決まりだ” と、人前に出ない事を肯定していた言葉を。

テレビにも良く出る。見せてもらったが、日本むかし話だった。雪女じゃねーか。

後から彼の知り合いに「ここ百年人とのカップルなんていねーよ（笑）」と言われ、記憶が無いなりに怒ったのは確かである。

結婚120周年。消えた記憶より、重ねた記憶が長くなって久し

く。

あの薬は本物だったのだなと、推定136歳になった私は思う。
やたら法螺を吹き込んでくる妖怪たちと生きるのは、多分、なかなか楽しいのであった。

異類婚姻譚 「記憶喪失」 (後書き)

妖怪もののシリーズの最初の話。
うわあ強引……

ハロウィンの話 上

ハロウィン。

それは俺があの子に会える、1年にたった1度の日だ。

「とりつくおあとリーと！」

そう言つてあの子が俺の家の玄関で笑つたのは、もう十年も前の話だ。

きらきらと輝く金髪の上に大きな黒い帽子を被つて、緑の眼を煌かせていた。

「……あ、えーつと。ちょっと待つてて」

正直なところ、ハロウィンなんて忘れていた。大体ここは日本で、そんな文化が浸透しているとは言えないのだ。

慌ててリビングのテーブル上に放置されていたお徳用のチョコレートを引つ掴んで舞い戻る。何故だか気分が高揚するのを、抑えられない気がした。

「わーっ、おっきいの！ やったあ！」

そう言って浮かべた嬉しげな笑顔に、落ちた、と思った。

それから毎年、ハロウィンが近づくとスーパーでお徳用のお菓子を買い込む。まあ、ルマンドとか、アルフォートとか、エリーゼとか…… ロアールとかアルチュールとか、要するにブルン製品ばかりだが。よく特売で売ってて安い。

あとホワイトロリータを渡した時には密かにどきどきした。あの少女を現しているような名前だ。

10年。8歳の彼女が越してきて、ようやく18歳。今年は来るだろうか、と期待しながらも。

ハロウィン、それは彼女に会える日だ。

……最近はそうでもない。時々挨拶も会話もする。でもやはり、ハロウィンは特別な日だ。

「Trick or Treat！」

年齢故に舌足らずだった彼女のその台詞も、この年になると流暢だ。

「……おにーさん？」

暫く黙っていた俺を、怪訝そうに見る。3つ上の俺は、お兄さん

と呼ばれていた。しかし。

「今年は、無いんだ。お菓子」

「へ」

今年からは、是非とも名前で呼んで頂きたい。

「で、イタズラはしてくれるわけ？」

「……っふきやああ!？」

よりによつて猫娘の格好で理性をトばせてくれた彼女を、ぐいつと家に引き込んだ。

ハロウィンの中

ハロウィン。

日本に来てからも、毎年欠かさず参加する行事。

密かな楽しみは、あの人の手がほんのちよつとだけ触れる瞬間だ。

6歳の時日本に来て、8歳の時ここに越してきた。

元々舌つ足らずにしか喋れず、日本に来て日本語ばかり喋っていたらますます英語が覚束なくなつて。

それでもハロウィンやクリスマスはやりたかつた。

新しいパパとママは日本人。アメリカで天涯孤独の身となつたあたしを、引き取ってくれた優しいひとたち。貿易会社のパパと、専業主婦のママだ。

ママにハロウィンをしたいといった時、始めはその存在すら知らなかつたらしくて、随分と苦労させてしまった。

でも地域の子供会に掛け合つて、みんなでやることになった。

その日あたしは、なかなかTrick or Treatを覚えられない友達を置いて、とつと隣の家に行ってお菓子をせしめることにしよう、とインターホンを押した。

「うーい」

カラカラと、引き戸の玄関が開く。中から出てきたのは3つ4つくらい年上の、あたしからしてみればお兄さんだった。

子供会は自由参加だし、このひとは参加していないのだろう。

お兄さんは目をぱちくりとさせて、「魔女お？」と小さく呟いた。

「とりつくおあとリーと！」

チラシは回してあった筈だ。そこでやっと思ひ出したようで、お兄さんは少し慌てたように引っ込んでいく。

「あいよ、お菓子」

少ししか年上に見えないのに、何だか大人びた人だった。お兄さんがくれたのはファミリーサイズの大きなチョコの袋で、でもその人から貰ったことに、なんでかすごく嬉しくなつて。

子供だったあたしは、その気持ちが何だかも知らないで無邪気に喜んだ。

毎年、毎年、お兄さんのくれるお菓子はお徳用。他の子には小袋であげるのに、あたしだけは何でか大きな袋のままくれる。特別扱いしてくれているみたいで、ちよつと嬉しい。

でも多分、あたしが最初に来ているからそういう扱いなんだろう。大きいお菓子をくれるお兄さんは子供達の間で大人気で、でもあた

しは毎年1番にお兄さんにお菓子を貰った。

今年はちよつと背伸びして、あの毎年だるそうな顔を崩せるかな、と猫耳と尻尾を付けてミニスカートを履いてニーソックスを装着。アキバ系？　つばい感じに仕上げてみた。

何のおばけなんだかよくわからないけど、日本には猫娘というやつが居るのだ。なんて素晴らしい！　あたしは喜び勇んで、いいかげん卒業しろよと言ってくる当時からの仲間を鼻で笑い飛ばした。

でも、もし、駄目だったら今年でやめる。
だっていいかげん、呆れられちゃうかもしれないから。

お兄さんはもう大学生。今日は家にいると窓から確認し、作り物の尻尾を揺らしてインターホンを押す。

昔よりは喋るようになったけど、でもやっぱり緊張する一瞬だ。

「Trick or Treat!」

お兄さんはあたしの格好を見て、停止した。

「…………おにーさん？」

ぎぎぎと音がしそうな動きで顔を上げる。そして手に持っていたファミリーサイズのルマンドの袋をガサツと放り投げた。…………え、くれないの？　っていうかまたブルボなの！？

「今年は、無いんだ。お菓子」

「へ」

いい笑顔で言われて、啞然とする。いや、今持ってたよね！？
お菓子！

「で、イタズラはしてくれるわけ？」

カボチャ型の籠がどさつと玄関先の床に落ちる。持っていた腕を引かれて、ぐわんと視界が揺れて、うしろでガラガラっていう音がして、

「……つふきやああ!？」

気づいたら、ぎゅって、抱き締められていた。

ハロウィンの話 下

がさ、と青年の踵が菓子袋に触れた。それはもはやこの場には無用の長物である。

あげた時の笑顔もいいが、それ以上にあげなかった代償の方が欲しい。

「お、にいさん、あのっ、うえっ、えと」

「……洋輔」

「はひっ!？」

顔を真っ赤にして、けれど逃げようとはしない少女の顔は最早蕩けそうだった。辛うじて緑色の眼は潤みながらもしっかりと青年を見ている。

「俺の名前」

「あっ……は、はいっ、し、知って」

知ってます、と続けようとして少女はますます顔を赤くし、口を嚙む。相手は自分の名前も知らないのに、こちらだけ知っているなど、恥ずかしくてたまらない。

だって、好きだったのだ。

わざわざ母に、あの家のひとつで何て名前なの、と聞いた8歳の日。

好きだと気づいた10歳の日。

年を重ねていくうち、少しずつだが会話するようになった。けれどそれは世間話の域を出ず、町内会のイベントで軽く挨拶して、ほんの少しだけ話すくらいだった。

「フランススカ」

だから、頭上から降ってきた声に、心臓が停止しそうなほど驚いた。

「えっ、あ、はいっ」

なんとなく大仰な感じのする名前をあまり気に入ってはいなかったのに、今この瞬間、全部塗り替えられて自分の名前が好きな言葉のトップに君臨した。

フランススカは、どこか言い辛そうに名前を紡いだ洋輔の顔を見上げる。

「……で、いいんだよな？」

「はいっ！ あ、あのっ、シスカって、みんなは呼びます」

「へー」

興味なさげな声に、フランススカはうつと詰まったような声を漏らした。嬉しさに任せて、なんて事を言ってしまったのだろうか、と。

「なら俺は、フランって呼ぶかな」

「……くっふあい！」

思わず赤い顔のまま、嬉しさを露になつこりと笑うフランシスカの顔を見て、う、と洋輔が呻く。

拒絶されていない事が嬉しすぎる。しかし更に、この笑顔が死ぬほど嬉しい。

猫というよりは、むしろ犬が尻尾を振っている幻覚が見える。洋輔はこの時ばかりは、無愛想だと親に散々言われる自分のポーカーフェイスがありがたい。

先ほど見せた笑顔は、それはもう久々のもので。不覚すぎて赤面しそだったのが、生憎とあまり顔には出なかった。

「あ、え、えっと、洋輔さんっ」

フランシスカは蕩けてあまり意味を成さない思考のまま、今ならいけるつとばかりに背伸びをした。今を逃してはもう後は無い。抱き締められていることすら忘れ、むしろ彼女はハロウィンの本分を果たした。

「い、いたずらですっ！！」

ちゅ、と柔らかな、マシユマロのような唇が洋輔の唇 ではなく、迷った末、Vネックの襟から覗く鎖骨のあたりに押し当てられた。

一瞬、沸騰したように洋輔の思考が停止する。

身長が足りなかったのだろう。どう頑張っても自分の顎や唇や頬や唇や唇には届かない、と洋輔は緩慢に理解する。理解したが、もう我慢の限界とも言えた。

「トリックオアトリート」

早口で言う。それはもう早口言葉かと突っ込みたくなるレベルの早口だった。フランシスカは一瞬潤んだ眼を見開き、そして次の瞬間、肩をびくんと跳ねさせた。

床に転がるお菓子を拾って渡す暇もない。迅速に甘味よりも更に甘いものを選択した洋輔が、僅かに背を曲げて視線を合わせ、

唇が、触れ合った。

「シスカちゃん、どうぞどうぞ寄ってって、ほら、洋輔！ あんたそろそろ離しなさい！ 何時間そうしてるつもり！？」

もう何もかも忘却の彼方に追いやって唇をくっ付けるだけの簡単なお仕事に従事していた青年と猫娘は、はっと我に返ってぎこちなく離れた。

もはや扉に背中を押し付ける状態でフレンチやらデ IPP やらと甘い空気を撒き散らしていた彼らである。途中に「好き……」とかそういう台詞が挟まったのもご愛嬌。むしろ、よくもまあ長時間キスだけに留められたものだ。

「げ、四時間ものの映画見てた筈じゃ」

「馬鹿ね。四時間なんてとっくに過ぎたわよ」

洋輔の母はおっほっほと腰に手を当てて高笑いした。フランス力は暫し衝撃のあまり停止していたが、はっとして玄関に散らばる菓子類を拾い集めた。

「ああええつとあのつ、お、お暇します！」

「やあだ、寄ってきなさいよ。お家には連絡してあるわ」

「！？」

なんとという早業だ、と2人は衝撃を受けた。40台に突入して尚も若々しい洋輔の母は、ほらほら、と引き戸を開けて中に入り、腕だけ出して手招きする。

「今日は5人分作つてあるのよねー」

そしてこの台詞に衝撃を受けたのは洋輔である。母と自分の二人暮らし。父親は単身赴任中である。つまり残りは、

ピンポーン。

間抜けにも聞こえるインターホンの音に、またも洋輔とフランス力は停止した。

「洋輔ー、出てちょうだい、ほら早く」

「は！？ …… あ、おう」

がらりとドアを開ける。そこにはいい笑顔でラップの掛かった料理の皿を持つ、初老に差し掛かるような夫婦が立っていた。

「ぱっ…… パパ！ ママ！？ な、なんでっ！？」

叫ぶフランススカ。しかし洋輔もまた後ろの戸に向かって叫ぶ。

「仕組んだな!？」

「何の事おー？」

おちゃらけたような母が父に対して行ってきた権謀術数の数々を知らない訳では無い。

常人には及びも付かぬ神算鬼謀でもって父を射止めたこの母は、時々恐ろしい。ちなみにミステリー映画では開始20分までに答えを言い当てる女だ。

結局5人揃って食卓に並び、親たちだけは和やかに談笑している。洋輔とフランススカは会話もせず、ぼんやりと手だけを動かしていた。

「種明かしすると、18歳にもなったんだしそろそろお付き合いくらいしてみたらどうかしらと思つて。この前スーパで偶然会つたのよね」

「そうそう。それで意気投合したら、まさかスカちゃんのお母さんだなんて」

もう何も言えない。親の強さというものを痛感しながら、洋輔はご丁寧にかボチャだらけを機械的に口に運んでいた。

「……知つてたの？」

隣のフランススカが情けない声を出す。彼女の両親はにこにこと笑っていた。

「だって、最初の年も名前聞いてきて、貰ってきたチョコも1日1つずつ大事に」

「きゃあああ！！ い、言わないでよっ、ママ！」

手痛い仕返しに涙目で手を振り回す。洋輔は恐る恐る母に顔を向け、浮かべられた艶やかな笑顔に頭を抱えたくなった。

「親を舐めないでよねー、洋輔」

「アンタって人は……」

「父親にそっくりだもの！ でもねえ、あんたの方が意気地なしね。折角テレビ見てるふりでスルーしてあげてるのに、寝室に連れ込まないなんて」

「わー！！！！ 食卓でそういう事言っ！！」

今度こそ本気で頭を抱えた。自由すぎる母親に悩まされて21年、これほど恥ずかしくなったことは始めてである。

奔放でいて一途なのだから、父親も自分も見捨てられないのだが。

「ああ、そうそう。お母さんたち親睦を深めるために旅行に出るからね。今から」

「えっ」

「2日くらい帰って来ないから、よろしく頼むよ、洋輔くん」

「え？」

「女の子を1人にしておく訳にはいかないからね。泊まっていつてちようだい」

「へっ？」

唖然とする2人を他所に、手際よく食器を片付けて食器洗い機に入れてスイッチを入れる。洋輔の母はしっかりと旅行鞆を手に持ち、ばっちーんとウィンクを残して出て行く。

フランススの父母もそれに続き、暫くして車が走り去る音が聞こえた。

「……マジで？」

「ふ、ふえ……え、えっと、その」

洋輔はまじまじとフランススを見る。未だに猫耳のついた彼女は死ぬほど可愛い。赤く染まった頬に触れると、ふにやりと柔らかい。そのまま本能に従って抱き上げてみると、軽い。

「あ」

思わず抱き上げてしまったが、後の祭りである。まあいいか、と洋輔は深く考えずに居間のソファにぼすんと降ろした。

「ひゃうううう……」

潤んだ眼ごと舐め上げなくなる愛らしさだが、そこは我慢する。洋輔は首を振り、とりあえず母親に叩きつけられた数々の衝撃は宇宙の彼方に投げ飛ばす事にして、そういえば言っていなかったな、と口を開く。

「結婚してくれ」

間違えた。いや間違いではないが、行き過ぎである。

「……じゃない。好きだ」

と言うにはどうも気持ちが強すぎて収まりが付かない。

「というよりは愛してる」

十年越しの想いを吐き出しきると、フランシスカはもう涙目と言
うか泣きながらこくこくと頷いていた。首が引き千切れそうだと
洋輔はその頬を持って固定する。

「ひゃうっ」

ああ、キスしようとしているみたいじゃないか。

洋輔は浮かれた脳みそでそう思いながら、じつとフランシスカを
眺める。一生眺めても飽きない光景だ。下はミニスカートにニーソ
ックスで絶対領域が眩しいし、上は上でワイシャツの白さと2つめ
まで開いたボタンが魅惑的である。

古めかしい感じのする吊りスカート。サスペンダーが片方落ちて
いるのも最高だった。

「フラン、は」

フランシスカはごくりと唾を飲んで、唇を僅かに開けた。

「す、すき……です」

消え入りそうな言葉は再び塞がれる。

もう言葉はいらんとばかりに、洋輔はひたすら唇を貪り、ついで
にそのけしからぬサスペンダーと胸の下に出来た隙間に指を突っ込
んでみたりしてフランシスカをどぎまぎさせた。

その後はまあ、お察しの通り。

日付が変わる前、思い出したように洋輔が呟く。

ハッピーハロウィン。

新年あけおめ略の番外 「その後のシノブとエリオット」 (前書き)

新年あけましておめでトリップ1999

(<http://ncode.syosetu.com/n8244x/>)

の番外編です

新年あけおめ略の番外 「その後のシノブとエリオット」

「来るなっ！ 来るなーっ！！」

下半身が蛸という濃い容姿のガルツ帝国宰相はいつもの光景を見かけ、微笑ましげな顔をして立ち止まった。

視線の先には、全速力で駆け抜ける黒髪に黒い目の少女と、後を追う金髪に青い目の青年。

新たな魔王となったシノブ・サトーと、その補佐である元ケイオステイ王国王子のエリオット・ケイオステイ。前魔王を倒した元勇者とお供でもあるが、気にする者はいない。

エリオットは既に悪魔となった身だし、シノブも既に魔王として望まぬうちに体が造り変えられている。

「待てよっ、シノブ！」

「待たないっつーの！」

「何でだ！？」

「何でじゃないっ！！」

ちなみに王太子であるエリオットが表向き死んだとされるケイオステイ王国についてだが、既に隣国に滅ぼされて跡形もない。シノブが守り、シノブが去った後の国は悲惨だった。4日後には周囲の国に制圧され、解体されている。

神官と騎士と魔術師の死体は見つかったが、王子の死体は無かつ

た。

勇者が報われぬ恋を抑えきれず、王子を殺して死体を持ち去った。

そんな噂が実しやかに囁かれるが、2人は知らない。シノブは全力で嘆くだろうし、エリオットの方は喜ぶだろう。

「いいいいやああああっ！」

それにしても、素直でない。

宰相は僅かにニヤニヤしつつそう思った。エリオットがいくら悪魔として研鑽を積んでいるとはいえ、シノブも勇者であり魔王。追いつく訳が無い。

実の所シノブがパワー型でエリオットより足が遅いというのは誰も知らない。勝手に勘違いされているシノブにはいい迷惑である。顔を赤くしてじたばたするシノブの耳を、それはもう美味しそうに舐め上げるエリオット。大分変態になっているが、悪魔だから仕方ない。悪魔だから仕方ないのだ。

「まんざらでも、無さそうだがね」

誰の目に見てもそれは明らかであった。

顔を真っ赤にして硬直するシノブが求婚を受け入れるのは、果たしていつの事やら。

新年あけおめ略の番外 「佐藤信文、その生涯」(前書き)

新年あけましておめでトリップ1999

(<http://ncode.syosetu.com/n8244x/>)

の番外編です

新年あけおめ略の番外 「佐藤信文、その生涯」

佐藤信文は2歳の妹が可愛くて仕方無いごく普通の高校生だった。18歳、男盛りというか遊び盛り。受験勉強もしていたが、やはり遊ぶ方が楽しかった。

彼女も居たし、友人も多い。家族にも恵まれて、まさにこの時期は彼の幸せの絶頂だったのだろう。

「しの、健太の所行くか」
「あい」

2歳の妹・志信は愛らしい。目に入れても痛くない程だ。そして健太は隣の家に住む、やはり2歳の子供である。一纏めにして信文が面倒を見る事が多かった。

日常が壊れたのは、何の変哲も無い夏の日。

一枚だけ出し忘れた、遠く離れた所に住む友人への葉書。昨年転校して行った彼に向けての暑中見舞いを、すぐ其処にあるポストに出そうと思い、一歩家を踏み出した。

瞬間、世界が変わった。

信文は勇者として異世界に召喚された。ザルベリグン王国とやらが危機に晒されており、彼は魔王を倒さねばならないらしい。信文は最初こそ突っぱねた。当たり前である。彼は分別ある18歳で、正義感だけで動けた10歳のどこぞの誰かとは違う。けれど結局、自分に付けられた侍女の懇願に、絆された。あまりにも哀れだった。

3年間の修行。ザルベリグンの魔法技術はケイオステイには及ばず、魔法による補正が低く時間がかかった。けれど殆どの技能が完成されれば、彼は勇者と名乗るに足る、絶対的な力を得ていた。戻る時には時間を戻してくれると、そういう話だった。

旅は順調だった。仲間は、剣士がひとり、魔女と巫女。信文は誰にも好かれ愛され尊敬され、各地を平和に戻していった。

それは、物語の勇者そのもの。

だから、華々しく終わるものと　無事に帰れるものだと思っていたのだ。けれど、現実には彼に厳しかった。

魔王を倒して帰還した王城は、一変していた。

王族は元々、国王派と王弟派に二分されていた。信文は知らなかったが、彼らは王位継承の時にも散々揉めたのだ。

そして今、二度目のクーデターが起こったのだ。城に帰ってみれば、まんまと信文は捕らえられた。何も知らなかったのだ。

玉座には王弟が座っている。

それは此処に引つ立てられる前に十分理解していた事だ。

しかし信文はそれ以上に　その横に居る人物を見て、驚愕した。
「嘘だろ……」

媚びるように腕を絡める、派手なドレスの女。しかしその顔は、忘れようにも忘れられない。あの日、愛する家族を亡くしたのだと、何も無いのだと泣いた女。メイドだった女が其処にいた。

「何が？」

「ふん、教えてやるがよい」

「ええ……国王陛下」

どきりと心臓が鳴る。この先を聞いたなら戻れないのだと信文は理解したが、聞かされる。魔法も腕も封じられており、もう打つ手は無い。

仲間は、と視線を彷徨わせる。

「来ないわよ」

ぎくりとする。女は唇を歪めて笑うと、残酷な言葉を紡いでいく。

「あたしは最初から、こちら側よ」

「……」

「全部、嘘。家族なんて元々いやしないもの」

ぎり、と歯を噛み締める。信じたくなかった。あの涙が全て嘘だとしたら、自分は何のために旅をしたのか分からない。

……いや、違う。最初は問題じゃない。救ってきた人々の笑顔のため、そう思えばいい。

そう自分を誤魔化そうとした所に、追い討ち。

「ノブフミ・サトー。馬鹿な男」

ごろん、と何か目の前に投げ込まれたものがあつた。それが何なのか、信文は一瞬理解できず。そして、理解しなくなつた、とその直後に思つた。

「そ……んな、そんなつ、」

剣士の、首。

その両脇から、ひとり、と白黒のブーツが二組見える。もう、見なくても分かるくらいに見覚えがある。手の震えが止まらない。がたがたと震え、唇は青ざめていた。

「サキア、ツエーリ、よくやった。褒めてつかわす」

サキア。魔女の名前だつた。高飛車で意地っ張りで、けれど努力家だつた。

ツエーリ。巫女の名前だつた。温厚で心優しく、誰よりも民を案じていた。

「ま……マークス……お、お前ら、何で」

マークス。剣士の名前だつた。豪快で勇敢で、親友とも言えた。

物言わぬ首は、ただ信文を睨みつけている。食いしばつた唇に寄せた眉根。怒つた様な顔で、殺されている。

「まだ理解できませんか」

哀れむような巫女の言葉。

「あつたま悪いわね」

嘲るような魔女の言葉。

全てが理解できない。ぼうつとしているうちに、公開処刑とする、と告げられて牢にぶちこまれた。

不可視の悪魔が、耳元で甘く囁いて理解させてくる。裏切られたのよ、と。裏切ら

信文は無気力だった。もう逃げるつもりもなく、いつそ殺して欲しいと思った。元の世界に戻る術など知らない。何もかもが敵に回ってしまえば、勇者はもう勇者ではない。

外では自分は裏切り者として扱われているのだと、牢に居た兵士が戯れに教えた。

「可哀想なこつたな。まあ、俺は王弟……や、王か。そっちに賛成だが」

兵士同士の話し声。彼らにとっては、どちらが王だろうが大差ないのだろう。

「何でだ？　っーか何で今更」

「勇者を召喚したのはまあいいんだが、湯水のように金使ったしな。給金増えるに越した事はねえわ」

「あー、それはあるな。大体何で国の危機にあんな派手なパレードとかやるんだっつーの」

「警備も大変なのによー、給金は減る一方だし」

彼らにとつては、末永い平和よりも貰える給金こそが現実的で好ましいのだ。

自分のしてきた事がひどく空虚に思えて、耳を塞ぐ。

そうして1日2日と過ぎていった時、不意に兵士が騒ぎながら外に出て行く音がした。ずつと俯いていた顔を上げると、其処には闇のような男が立っている。

「ゆーうしゃっ」

フードから覗いた口元が楽しげに笑っていた。チェシャ猫のよう

なその男は、両手に血塗れのナイフを持ってくるりと回す。

「何だよ。まだ暗殺しようってのか」

彼は修行していた時期に何度も信文を殺そうとしてきた、殺し屋だった。彼はフードを落として派手な紫の頭を露にし、真っ黒な目を細めて晒っている。

「助けに来てあげただけどー？」

「嘘臭えよ。いらないし」

「善意じゃなくて悪意だからさあ。いいじゃん、ほら。来いよ」

がらんと音がして鉄格子が全て細切れになった。腕を引っ張られ、拘束具の数々もすぐに地面に落ちる。相変わらず人外じみている、と溜息を吐いた。

「俺はもう、助かる気なんてない」

「嘘つけ。だったら舌でも噛んで死にゃあいいのになー」

「死に際くらい人任せにしたい」

「おーおー」

笑いながら、強い力で引き摺られて仕方なく歩く。城内は慌しく、明らかに彼の侵入が問題になっていた。信文は溜息を吐く。

何故か人にも遭わずに、城下町まで出る。何事もなく、平和な町だ。人の気も知らないで思いながら、信文は放り出された。

「じゃーな、影ながら見てるよ」

「はあっ！？ お前」

音もなく消えた殺し屋に、溜息を吐く。どうすればいいのだろう。脱獄したと追われるに決まっているし、街でどうなっているのかも分からない。

呆然と路地裏に立っていると声が掛かる。

「あんた、勇者様じゃないかい？」

「……あ」

宿屋のおかみだ。しまったと一瞬思ったが、逃げるのも可笑しいだろう。武器も何も無いが気絶させる程度なら出来る。しかし、躊躇する気持ちが強かった。

「やっぱり勇者様！ 心配してたんだよ、逃げてきたんだろう？
うちで少しなら匿ってあげられるさ」

その言葉に顔を上げる。信じてくれるのかと、むしろこちらが信じられないような気持ちになる。磨り減った心は、あっさりと彼女を信用した。

けれど、それは間違いでしかなかった。人間というものは、いくら信用する人間だとしても　　そうそう罪人を守ろうとはしない。

「……あんた、早くっ」

「わ、わかった。これで……」

「そうだよ。うちが手柄だっ」

夜中、トイレに行こうと部屋を出た時に階下から聞こえた声に、硬直した。

耳元で悪魔が囁く。裏切られたよ、また。　　違う、違う。喉が

乾いて言葉も出ない。階段を駆け下りて、信文は椅子を蹴飛ばした。俺は、ここにいて、と。

「ひっ」

悲鳴。脅えられている。そのことに、何より心臓がずきりと痛むような気がした。

何を言おうとしたのか。崩れていく心を撫でるような、見えない悪魔の睦み言。

ねえ、もういいでしょ？

びきりと地面が罅割れる。武器が無いから、何だ。戦ううちに膨れ上がった膨大な魔力は、どす黒く色を変えている。信文はふらりと体を一步前に動かし、感じる痺れに薬を盛られた事を悟る。

恨もうよ。呪おうよ。

兵士たちが駆けつけた時には、そこには。

頭を割られ、ぴくぴくと痙攣している死に掛けた女しか居なかった。

空が曇る。雷撃が町を穿つ。魔王は孵った。絶望を胸に、世界を

呪い。魔神の声に魔物が咆哮し、魔族が喜びも露に笑う。笑う。

地獄の中で、かさついた心を抱き締めて、ただ無気力な日々。そして。

「奇遇だけど、私も佐藤。佐藤志信」

泣き笑いを浮かべた勇者は。最後の最後に、与えられた救いだつた。

「ごめん」

殺せ殺せ殺せ。敵側の魔族がみな、そう言う。止まらない。止まらない。

「殺せ、早く」

いびつな救いだ。涙を散らしながら、白い鎧に包まれた聖なる女は剣を振るう。抵抗など一切もなく、首を刈られる。強く、育ったものだ。

殺されても、裏切られてはいない。

確かに残る肉親の情に、信文はどこか満足した笑みを浮かべながら、この世を去った。

ノブフミ・サトー、悲劇の勇者であり元魔王である彼は、やがて前世の記憶を持ったまま転生した。なんと、第182代魔王シノブ・サトーと夫エリオットの第5子として。

「てめえエリオット!」

「息子のくせに口出ししてんじゃねーよっ」

「ああ!? 兄上と呼べっ!」

父親Ⅱ弟という奇妙な状況ながら、彼は今度こそ幸福に人生を全うしたという。

これにて、終幕。

異類婚姻譚 「河童の嫁取り」

河童という響きのなんと奇妙で愛らしいことか。
目の前にある緑色の頭をべちべちと叩きながら、そう思う。

「いたっ！ 痛い！ 痛いです本当に！」

しかし目の前の河童はいただけない。何故現代だからといって、
漫画かぶれのイケメン顔をしているのか。緑の頭に目の男だなんて
全く面白味がない。

泳ぎは異常に上手だし、手にも水かきらしきものがあるし、頭と
目は緑。しかしそれだけで河童を名乗るのは全くもっていただけな
い。

「私の婿になりたいなら、甲羅と皿のひとつでも見せろ」

「む、無理ですってばああ……」

そう、こいつは私の婿になりに来たというのだ。

正しくは私を嫁に取りに来たが、生憎私はこの家を離れられない。
何故かと言われても、跡取りだから仕方ないだろう。

河童は好きだから構わないが、こやつでは意味が無い。胡瓜の無
駄遣いだ。

「おい」

「はいいい」

「そもそもお前、妖怪のくせに何故そんなに情けないんだ」

うつ伏せの状態で背中を椅子にされている河童もときは、うええと泣きそうな声。

「水の力が使えますけど、室内じゃないですか」

「そうだな。で？」

「で、って……濡れたら嫌でしょうに……」

「妖怪のくせに」

情けない。

「すいませんすいません調子乗ってすいません……」

「情けない奴だ」

「で、でも、好きなんですよう……」

……情けない。

「そんなに好きなら、自力で攫え。ロリコン」

「え、あ」

「言うておくが、このナリでも私は跡取りだぞ。妖怪退治の大御所に勝てるならば連れていっても良い。情けない河童よ」

「ほ、ほ、ほんとですか!？」

ぱつといきなり起き上がられたものだから、顔から畳に突っ込みかける。

危ないと思ったその時、腹を何かが支えた。

「じゃあそうします！　ありがとうございます！」
「……っな」

水の手だ。攻撃されたと感じ、手は自然に懐にある札を取ろうとする。しかしそれは既にびしょ濡れになり、使い物にならないほど滲んでいた。

……情けないくせに中々やる。壁際に立てかけてある薙刀を取ろうとして、

「させません！」
「くっ!?!」

体が水に絡め取られ、水球に閉じ込められる。息がと思うと、「息できますよ」と声が掛けられた。言葉に従い吸い込んでみれば、自然に肺の空気と交換されて酸素の変わりになる。……そういう液もあると聞いたが、普通の水にしか見えん。

「……やるではないか。うちのジジいどもに勝てたら、連れ去るが
良い」

「はいっ?」

「何だ、私だけに勝てばいいとでも思ったか？　情けない河童だ」

ずがんと音がして壁に穴が開く。ひっと顔を青ざめさせた河童の前に、逆光で見えぬ人影。髭をもっさりとしやし、和服を着た老人……うちのジジイその1だ。

「河童よ！」

「はいいいっ！」

「孫を嫁に貰うというのなら儂を倒してゆけえいっ！」

「そうさせていただきますうつうつ!!」

そっちなのか。そっちなのかジジイ。跡取りの件はいいのか。いいのか!?

「こういう事もあるうつ! 分家の雅則めに目をつけておったわいッ!」

「おいジジイ最初から期待しておらんのではないかあああッ!!」

「はんっ! 言っておくがのうつ、武術は天才じゃが靈力が弱すぎるんじゃ孫おっ!」

「どちくしょおおおおおおおッ!!」

河童は情けないが、強かった。

祖父、曾祖父、叔父、父母、弟、分家の雅則（恨むぞこいつ）らを謙虚にも謝りながらバツバツと薙ぎ倒し、見事河童の里に連れ帰った。

そんな訳で、貰った薬で寿命を延ばしてもらい、現在私はこやつ
の妻である。

「夫殿。飯が出来た」

「あ、ありがとう」

情けなさは変わらんが、丁寧語は抜けた。しかしまあ、何故こんなに情けない性格なのか分らん。その割に度胸はあるが。

人のなりを出来る妖怪というのは力が強いらしい。強すぎて河童の姿では抑えきれぬというのが真相だ。遊びにきたこやつの友人に聞いた。

しかし屋敷は実家より大きいし、住み心地はよい。しかも河童が

沢山いる此処はまさしく樂園だ。よく考えてみると、嫁に来て良かった。

「仕事はどうだ？」

「ちゃんと出来てるよ」

にまにまとだらしない顔をしていたので、頭を叩く。情けない所はこれから矯正して行けばよからう。

……にしても、薬はもう少し後に飲めばよかったと思う。何せ、私は。

「美味しいなあ。よくできたね」

「馬鹿にしているのか」

まだ8歳と5ヶ月なのだから。

……嫁には来たが、子供が作れるかは怪しいな。そもそも作り方も知らんぞ。

とある河童の手記

先日河主が連れてきた嫁御はとても可愛らしい。しかし可愛すぎるというか、幼すぎる気がするのは気のせいかな。跡取りを作れと散々言われていたのに子作りどころでない年を選んできたのは一体嫌がらせなのか。いや、あの様子じゃ普通に惚れたんだろうとは予想できるが、河主の未来と性癖が大変心配である。

嫁御 初香様は、切り揃えた髪に巫女の服を着た大変お可愛ら

しい方で、なんとなく古めかしい喋り方をする所が座敷童みたいだ。陰陽だなんだとかいう家系の方だそうだが、感じる力はそんなに強くない。むしろ、腕っ節の方が驚異的だ。

里の子供らと相撲に興じている様子が多々見られるが、1度たりとも負けない。ガキ大将が早々にひれ伏したというのだから恐ろしい。

そして、並々ならぬ河童好きなのだそうだ。

それは良いのだが、嫁御様に可愛がられた河童が河主に報復されるのが怖い。1週間きゅうり抜きだとか、三日川に入らないとか、本当にやばい。死にかける。

情けないくせに嫁御様が絡むと怖い。本気で怖い。いつものへらへらした顔で告げられてトラウマになる河童が続出だ。

……早くもつと仲良くしていただきたいものだが、どうにも初香様は男女の事に疎い。

「のう、子供はどこから来る？ シキュウというのは腹にあるのだろうか？ どこからどうやって腹に子供が入るんだ」

しかも知識が微妙にあるものだから説明しにくい事この上ない。

「それはですな……」

言いよどんでいると河主様が現れた。もう見るだけでビクツとしてしまう自分が憎い。ちなみに私が受けた罰は天日干しの刑だ。自分は乾いても平気だからってこの仕打ち！

「それはね、初香」

「何だ仕事をさぼって」

「い、いいじゃないか。ちなみに初香、子供はね」

「うむ？」

聞きたくないので逃げた。法螺を吹くのか、あるいは体で教え込むのかは知らないがこちらのトラウマに残るのは確実だ。「僕と君が愛し合うと出来るんだよ」「ふむ。どうやって愛し合うんだ」「じゃあ寝室に」なんて会話は聞いていない。聞いていないぞ！ 私は児ポ法で逮捕される河主なんて見たくない！ 見たくないんだ！

見たくな

(ここで手記は掠れたような字と共に途切れている)

異類婚姻譚 「河童の嫁取り」 (後書き)

ロリコンの河童の話。

でもよく考えたら、そもそも妖怪はみんな長生きなので、8歳でも18歳でも大して変わらないとも言える。

……幼女と青年やオッサンの組み合わせは素敵ですよー！

異類婚姻譚 「覚り覚られ」

「あ、今怖いって思った？ 思ったよね」
「怖いわ！」

先日、妖怪に攫われた。何を言っているか分からないと思うが攫われた。

しかも滅茶苦茶性質が悪い。もう最悪の域。よりによってだよ！

「今よりによってとか言った？ うわあひどい」

「よりによってあんただった事に涙してんの」

「泣いてない癖にい」

「もう帰るー！」

「帰さないもーん」

もーんじゃねえええええ！！

そう、先ほどから思考を読みまくるこいつは 覚。さとり妖怪。そう、頭の中読んでくるアイツですよアイツ！ プライバシーも何もあつたもんじゃない！

「ぶらいばしい？ 何それー、美味しい？」

「美味しいわよっ」

「あ、今の嘘だねー。駄目だよ、嘘ついちゃ」

「きゃああああセクハラ禁止！ 禁止ーっ！！」

楓さんとの栞ちゃんが羨ましい。だってあんな優しいおにーさんだよ！ 蓮さんちもいいよね、初香ちゃんマジ可愛いし！ あれ、逆？

うちのこれはないわ！ 心底無いわ！ あの超ごっつい牛鬼さんとかの方がマシだ！

「……………」

「いきなり黙られると怖いんだけど！」

突然沈黙する覚。ちなみに名前は覚と書いてサトル。ややこしいね！

……………ちょ、何？ 何でずっと黙り込んでんの？

……………ねえ、ちょっと！

「牛鬼の方がマシ？」

「……………覚？」

「そつ、そつかあ。あはは、でもね」

ぐわ、と体が揺れて畳に引き倒された。頭ぶつけたんだけど。

「君、不細工だからさあ」

「……………はあ」

「貰ってくれるような物好き、僕しか居ないんだよ」

ストレートに性格の悪い言葉が降って来る。顔の両脇に腕を付いて覆いかぶさり、ぐっさぐさと心を突き刺す言葉をぺらぺらと紡ぐ。……………やっぱこいつやだ。

「大体ね、自分が可愛いとか思ってるの？」

思ってるないし。……無いし。うん、無い。

「思ってるでしょ？ あはは、必死に考えたって意味ないよ」

……。

「ねー？ ほら、目、逸らさないでよ。駄目でしょ、ちゃんと人の目見て話さないと」

なにがしたいのこいつは。

「何がしたい？ 強いて言えはいじめたいのかなー、あはははは」

……まじ、もう、やだ。

そうして毎日毎日さんざっぱら言葉でぶちのめされながらも、なんだかんだといって私も駄目な女だ。馬鹿女と罵られても反論できない。

だって、散々苛めて泣かせた後に、言うから。

「まあ、そういうところが」

その先は無い。ただ照れたようにふいと視線を逸らす。こいつの思考は、表情だけでよく分かる。実はサトリじゃなくてサトラレじゃないの？

「うつさい」

ふん、と憮然とした態度で横に転がる。散々罵って疲れたのか満足したのか目を閉じている。ふ、ガキめ！

「5ミリ背が高いだけで大人ぶらないでよ。年だけなら上だから」

「そうだったけ」

「そうだよ」

人の二の腕に頭乗っけてくるとことか、本当にガキにしか見えない。ひとつ年下の後輩みたいな感じだ。

「夫なんだけど……」

「はあ？ 認めてないし」

「認めるも何も、妖怪社会じゃ貞操取ったが勝ちだから」

「何それ。貞操、って」

「だから、エロい事したら勝ち？」

えへっ、と小首を傾げて一言。……知るか妖怪の掟なんて！

「……よし、逃げよう」

「あれ、逃げられると思ってるのかなー？ あはは」

顔を引き攣らせた私の二の腕にギリギリと負荷が。痛い痛い痛い痛い！

しかし私は知っている。この先はさらに痛い！ 下はガキじゃないから（下品）！

「うん、だからガキじゃないって言うてるでしょ」

「こっ……のー！」

布団も敷かず、この中学生野郎！

……と、上げようとした声はナイスタイミングに降って来る唇に飲み込まれ。

あとはまあ、お察しの通り。

数年後、母親の内心を読みまくる、可愛いながら憎たらしいガキ共に囲まれてしまったのはまさしく一生の不覚。ええ本当に、どこでどう間違っただろうな！

異類婚姻譚 「覚り覚られ」(後書き)

サトリの話。

1 番遭遇したくないタイプ。

妄想を暴露されたらその場で舌を噛み千切る自信があります。いえ、
やっぱりチキンなので多分逃げますね！

異類婚姻譚 「赤鬼のマーチ」

妖怪というものを、私は信じておりませんでした。いえ、というか信じている方も珍しいでしょう。……しかし、彼らが確かに存在するという事を私は知りました。だって、

「そ、その、百合。大事無いか」

「はい、あなた」

「そうか。そ、そうだ、これを！ 土産だ。途中で買ってきたっ」
「まあ、素敵な櫛ですね」

ウェンディングドレス姿で結婚秒読みだった私を攫ってくれたこの方の頭には、本物の角が生えておりますから。

ええ、信じざるを得ません。触ってみれば確かに頭皮から生えています。両耳の数センチ上から生える角は滑らかで象牙のようです。かなり敏感だそうで、触ると恥ずかしそうにしておられますが。

「そうだ。そ、そのだな、明日は休みなんだ」

「それは良かったですね」

「お前がつ、暇だったらだが！ 少し、隣の山にでも、散歩に！」
「勿論、構いませんよ」

燃えるような赤い髪と目から察するに、赤鬼さんなのでしょう。

名前を椿さんと仰る夫は、背は高く筋肉質で、顔立ちは鋭い刃物で切り開いたようなすつと通る切れ長の目や鼻筋、薄い唇、輪郭もスマートで大変お美しいです。

……この冷たげな美貌の主が、どうしてこう不器用で無骨な方なんでしょうね？

ちなみにこの、巷で言う細マッチョな見た目ですがとてつもない強力の持ち主です。攫われた時、車どころかトラック1つ引っ繰り返した所を目撃しました。

「そうか！」

にこにこと笑う顔が、伶俐な美貌に明るい色を添える。ええ、いい方に嫁ぎました。人外ですが、全く異論ございません。

結婚する筈だった相手の方ですが、あまり好みではございませんでしたし。というか、10も年上のお腹の出たおじさまを好む20代女性もあまりいらっしやらないと思いますが。

その点椿さんは200くらい年上ですが、美形で性格にも問題ありませんし、可愛いです。

ええ、とてもお可愛らしくていらっしやいます。何せもう、

「では、お弁当を作りますしょうか？」

「弁当！？ ……っそ、そうだな！ それがいい」

喜色満面。もうなんと言いますか、にぱー、と笑っています。胸がいつぱいになりますね、この笑顔。君の瞳は100万ドルだよと言いますが、この方の笑顔は100万ドルどころではありませんね。日本の借金総額くらいは軽いです。

「櫛、ありがとうございます。夕食になさいますか？ お風呂を先に？」

なんとなく悪戯心が湧いて、お約束の一言を追加。

「それとも私になさいますか？」

髪と同じ程に顔を真っ赤にして硬直する椿さんは可愛らしいと言っておきましょう。

「というか何度目でしょうね、これ。」

夕食を終え、それぞれ風呂に入ります。まだ眠るには早いので、私は大抵編み物が縫い物、読書でもする時間です。

此処に来るまでは使った事のなかったコタツに向かい合わせて潜り、テレビを横目に眺めつつあみあみあみあみと単純作業。ええ、良いですねえ。憧れてましたこういうの。

「というかテレビがあるんですよ、ここ。もちろん人間のテレビも見られますが、妖怪放送というものがあります。つまり妖怪のテレビなんです、これが中々面白いのです。」

『人界不介入の条約が改正され、限定的に介入を許可する方向に』

「これ、どなたが放送してらっしゃるんですか？」

「ん？ ……狐と狸の連中だ。機材に化けられるんだ」

「まあ、凄いですね」

妖怪社会も近代化真っ最中だそうです。ちなみにこの付近では、山神様に最終的な承認や任命を頼み、その下に数の多い妖怪の頭が

集まる議会制だそうですよ。椿さんもそのうちの1人だそうですよ。鼻高々です。

『今回の改正をリードした天狗族の』

「他にも人間がいらつしやるんですね」

「あ、ああ。……ええと、会いたいか？」

「お会いしたいとは思いますが、みなさんお若いようですし……お話に入れるかしら」

テレビに映る、黒い翼のある男性の横には制服姿の少女が立っております。近年初の妖怪と人間の夫婦だそうです。うっかり条約を破って誘拐してしまったため、逆に条約の方を変えたという情熱的な方です。

楓さんと椋さん、ですか。そのうちお会いしたいとは思いますが、なんだか画面の向こうの方という感じが強いですね。芸能人みたいです。

「まあ、凄い年の差の方ですね」

「そ、そうだな。まあ、差で言えばこっちもあまり変わらん、が」「そうでした」

次に映ったのは、改正を全力で後押ししたという河童族の方。隣にはほんの小学生くらいの女の子の姿。巫女装束を着て、とても愛らしいです。

お名前は蓮さんと初香ちゃんだそうです。夫婦というより親子に見えますけどねえ。法律とか大丈夫でしょうか？ いえ、そもそも8歳児は結婚できないと思いますが。人間の法律は関係ないという事です。

「……あら、この方は？」

「こいつは……議会の目付だ。覚だから、嘘を吐いていないか見る」「サトリ、ですか。聞いたことのない妖怪さんですが」

「人の心が読める」

比較的若い、中学生か高校生くらいの少年が目付さんらしいです。顔立ちは可愛らしく、髪と目は明るめの茶色で、いかにも今時風ですね。

そしてカメラが横にずれると、無然とした顔で立っている高校生くらいの女の子。こちらは染めた感じの茶髪を巻いて化粧もちゃんとしていますし、可愛らしいです。怒ったような顔が残念ですが。覚さんと舞さん、街を歩いてても違和感ないです。

「色んな方がいらつしやるんですね」

「……あ、ああ。そうだな」

というか、あれだけ派手な事をしたのに外でニュースになっていないのが驚きですね。

妖怪の術とやらは凄いです。

一ヶ月前、お腹が些か出すぎた感じのある30代男性との結婚式前。控え室でぼんやりと待っていた時、突如轟音が響き渡りました。

なんと、壁に大穴が開いていたのです。

しかもそこから背の高い、角の生えたシルエツトが覗くものから仰天いたしました。

「まあ、どなたですか？」

とりあえず聞いてみると、埃が晴れて現れた赤い髪的美丈夫が言ったのです。

「つ、椿だ。お前をつ、む、迎えに……っ!!」

思えばあの時からもうカミカミでしたね。どなたと聞かれて正直に名前を答えるあたりも面白いです。面白かったので、なんとなく抵抗しませんでした。いえ別に結婚が嫌だった訳ではないですよ？ただ好みじゃなかっただけでして。ええ、本当に。

聞きつけて来た人たちは悉く非現実的な光景に驚いておられました。そのまま外に駆け出て、目の前にあったトラックの横腹を蹴り倒し、相手方のものらしいリムジンをぶっ飛ばしつつド派手に誘拐屋上に飛び上がった時とか、大変面白かったです。

そのまま妖怪の住む場所に直行、鬼の里に連れ帰られ、翌日には白無垢姿で婚姻を結んでおりました。まあなんて手の早いお方でしょうと思いましたが、終始照れっぱなしでしたので許します。

ちなみに妖怪の里はよく分からない場所にございまして、人間の住む人界とはほんの少しずれていて、普通の人間や動物は自然に逸れてしまうそうです。出入りするには少々面倒な手順があるだけで、私はもう何度も行き来していますが。

「そろそろ、ね、寝るか」

顔を真っ赤にしながら、椿さんが言う。夫婦ですから、寝るという意味は勿論額面通りではありません。そろそろ慣れてもらいたいものですけど、この人の照れ屋は筋金入りなのでゆっくり矯正していきたいと思います。……何せ、人生まだ長いですから。

人間五十年、現代では80歳くらいが日本での平均寿命かと存じておりますが、妖怪はなんとびっくり千年の長きを生きるとのことです、私も寿命を延ばす薬を飲んでいます。

「はい、あなた」

嬉しい事に老化もストップするそうで、この先800年くらいはこのままの姿だそうです。

まあ、50年後くらいには照れないようになっていて欲しいですが。

「灯、消しますね」

「あ、ああ」

妖怪が持っている妖力というもので点灯する狐火のような灯りを消しても、月明かりで部屋はぼんやりと明るいです。中庭に面していて、障子を明ければ夜空が見えます。

テレビを始めとした電化製品はありますが、電気ではなくやはり妖力で動いているらしく、家の周りにも電線や電柱といったものはありません。放送や通信もやはり妖力で行われているそうで、機械を経由する必要も無いらしいです。

……田舎での生活、慣れておりました。それに、人間の技術と比べてなんとエコロジーな生活でしょう。私も練習すれば霊力というものに似たことが出来るらしいですが、どうにも想像が付きません。しかしそういう事より、ずっと。

「そ、その、いいか？」

暗闇でも分かるほど顔を赤くして手を伸ばしてくるのを見て、思わず笑みが零れます。

初心な男を育てるというのも、女の甲斐性だと思いませんか？

「はい」

控えめすぎる手を取って自分に押し付けつつ、そう思っているのであります。

頭領が奥方を攫ってきたと聞いて、赤鬼の里が揺れた。激震した。だってあの頭領が……血の似合う赤の頭領が！『血染めの椿』とか呼ばれてるあの人が！「敵対すると椿のように首を落とすから椿」と専らの噂なあの人がだ！

「ゆ、百合、どうだ。綺麗か？」

「はい、とても綺麗ですね。湖に落ち葉が浮いて、なんと風情のあることでしょう」

奥方を前にすると顔まで真っ赤の赤鬼だなんて！

……おお、未だに信じられない。何せこの大人数で尾行しているのに気づかないなんて衝撃的だ。いつもなら後ろに回るだけで回し蹴りが飛ぶというのに。

しかも奥方　百合どのは、今時珍しいほどに“よき妻”を体現したような方だ。ますますどうしてあの荒くれ頭領の嫁にとは思うが、びつくりするほど大人しい頭領はでれしながら奥方の手を握ろうとして引っ込めている。ああつ、また！

百合どのは黒髪を後ろで纏めてばれたとかばてれんとかいう現代風の髪留めで留めた、うなじの綺麗な女性だ。うなじも良いが、胸も尻もしっかり出ていて大変すばら……けしからぬ体形でいらっしやる。そういう所に惚れたのだろっか、頭領。案外巨乳好きだな、頭領。河童の所のあるみたいに幼女誘拐したり、鴉の頭みたいに女子高生連れてくるより健全な趣味かとは思っが。

頭領がいつ百合どのに惚れたかというと、テレビで偶然見たそう。なんでも有名会社のご令嬢で、父親が何かやらかしたらしく記者会見でインタビューに答えていた。すっかり気の抜けてしまったらしい母親とは逆に、批判にも好奇の目にも心揺らさぬ不動っぷりに一目で惚れ、その後結婚すると聞いて居ても立ってもいられずに

突っ込んでいった。

……いや、なんつーか凄い人だ、両方。会社？ 援助してくれる筈だった結婚相手の会社諸共倒産したらしい。知っているだろうに平然としているのがまた凄い。

あとこの前抗争で血みどろになりつつ百合どのが心配すぎて駆け戻って行った時も、俺たちの心配とは裏腹に平然と「まあ、少々お待ちください」とタオルを持ってくるような奥方だ。流血沙汰の多い鬼の里に住むには適しているかもしれん。

「あなた」

百合どのが苦笑して手を伸ばし、ゆらゆらとしていた頭領の手を取る。おお、やっと繋いだ。しかしまあ、うちの頭領はウブだな。

「！ ゆ、百合」

「手、繋いでくださいませ。転んでしまいそうですから」

なんて出来た嫁なんだ。いいな俺も欲しいつつーか結婚してくれ奥方ー！

異類婚姻譚 「赤鬼のマーチ」(後書き)

照れ屋の脳筋さんを翻弄するお嬢様、というのも使い古されたパターンのような気がします、書いてて楽しいです。

鬼の里の頭領と、倒産した会社の令嬢という謎の組み合わせ。えーとつまりエセ中世風に言えば傭兵団の団長と没落貴族の娘みたいな。

題名は赤鬼と青鬼のタンゴリスペクト。そのうち青鬼も書く予定。歌詞的には角1本が赤鬼で角2本が青鬼ですが、逆になった。

ポッキー&プリッツの日の話（前書き）

詰め合わせです。

ポッキー&プリッツの日の話

赤鬼と奥方編

「はい、あなた。あーん」

「……っ！……！！」

「恥ずかしがっていないで、食べてくださいませ」

顔を真っ赤にした椿は、僅かに震えながら唇を軽く開いた。

最早その髪と同じほどに赤く染まった顔は、里の長という威厳を欠片も感じさせない。

その妻百合は薄らと、どこかサディスティックに微笑んで銜えさせたポッキーの反対側を唇で挟む。

「！？」

そのまま夫が口を動かさないのを見てか、ポッキーを食べ進めていく。徐々に接近する顔に目を白黒させる椿。ますます笑みを深くし、最後には勿論

「ん……」

唇が触れ合う。意図的に小さく声を漏らすと、椿の肩が揺れた。暫くその切れ長の目にありありと動揺を浮かべていたが、決心したように目を閉じて百合を引き寄せる。

(……あら)

ほんの僅かな進歩に、百合は嬉しげに頬を染めた。

ティエラとラオム編

「ラオムさん！ いざ、ポッキーゲームです！」

ポッキーゲームと言いつつ、ティエラが銜えているのはプリッツである。

猫に限らず、大抵の動物にチョコレートは厳禁だ。

……魔物には関係無いが。

それを目の前で聞いたラオムは、僅かに戸惑ったように目を泳がせた。

折角ティエラが提案してくれたのだ。彼には今一わからないのだが、しかし。

たっぷり十秒ほど間を置いて、彼は重々しく言った。

「……無理だろう」

「にやつ!？」

「小さすぎて狙いが付かん。お前の頭まで噛み砕いてしまったら困る」

「それは困りますね！」

ティエラが愛らしく小首をかしげ、どうしよう、と唸り始める。口にはプリッツを銜えたままだ。足元には器用にもちゃんと開けられたプリッツの袋が落ちている。

どこから拾ってきたのだろうか。ちなみに味はトマトである。

「……そう、そうです！」

「何だ？」

「何もポッキーやプリッツである必要は無いです。大腿骨とかどうですか？」

「骨か」

一気にイベントの種類が狩りの類になるあたりが魔生物であった。

河童と幼妻編

「初香、あーん」

「ふん」

思い切り顔を逸らした初香に、残念そうな顔で蓮が手を引く。持っていたポッキーを開けたばかりの袋に戻す。

「食べてくれないの？」

「うるさい。女々しいぞ」

「え、ええ？」

「大体……！」

初香は僅かに顔を赤くして立ち上がる。

「人の手で食べ物を食わされるほど子供ではないっ……！」

「！？ え、いや」

「夫殿の馬鹿っ！」

そして障子を勢い良く開き、全速力で逃げて行った。
とてつもなく早い。

「えっ……ちょっ、そういう意味じゃないのに！」

慌てて追い駆けるが、既に初香は影かも形も見えない。

結局、追いついて説明するまでに数時間を要したのであった。

シノブとエリオット編

（時系列：まだ落ちてません）

「……あ」

「何だ？」

「11月11日」

玉座でぐったりとしていたシノブは、ふと日付に気づいてはつと
した。

部下達によるイメージ戦略の所為で、マントの中は割と際どい服
装だ。その足元に跪いたエリオットがうっとりとふくらはぎに頬を

摺り寄せている事については、もう諦めた。

悪魔だから仕方ない。
それに尽きる。

「……何の日？」

「ポツキーの日……って言ってもわかんないか」

「分かんねーけど。シノブがポツキーって言ったから今日はポツキー記念日」

「頭沸いてる……」

心底引いた目で見られても、エリオットはむしろ嬉しげである。
悪魔だから仕方ない。

そうこうしているうちにゆっくりと靴まで脱がされそうになったので、とりあえず顔を蹴って逃げ出す。

「え、何で逃げんだよ」

「あのままじゃ足の指までしゃぶられるっ！！」

「何で分かつ　待てよ、シノブ！」

「待たんわああああっ！！」

結局捕まって言葉通りにされたのは言うまでもない。
悪魔だから、仕方ないのである。

鴉天狗と女子高生妻編

「椛。口を」

「あーん」

「閉じろ」

「ん」
「そのまま停止」
「……んんっ」

反対側から食べて進むのかと思いきや、面倒そうにプリッツをぽきりと折ってそのまま口付ける。意味が無い、と抗議しようにも口を塞がれてはどうしようもない。

暫くそのままキスが続く。口の中に残っていたふやけたプリッツは最早味が無い。

「酷いですね……」
「そうか」

「というか、食べてないじゃないですか」
「食べた。お前の口の中にあつたものを」
「それ、食べたうちに入るんですかね」

不服そうに眉を顰めた椋の口に、残っていたプリッツを押し込む。

「大体、意味がわからん」
「何がですか？」
「ぽっきーげーむとやらだ」
「ああ……多分、ハプニング的な……まあ宴会とかでの事でしょうけど、わーわー言ってる時は盛り上がるんじゃないですか」
「なら、要らないな」
「わっ！……あのですね、いきなり抱き付かれるとびっくりしますよ。大体ここ、不安定なんですから」
「気にするな」
「落ちたら拾ってください」
「当たり前だ」

と、高い木の上での会話である。

ポッキー&プリッツの日の話（後書き）

全然ポッキー食べてない話が大半なのは気にしない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3501y/>

おつまみの短編集

2011年11月27日13時47分発行